２０２３年度

愛知の総合学習

（第１８集）

もくじ

Ⅰ　教育課程編成活動について

１　総合学習における「ゆたかな学び」 2

２　総合学習における教育課程編成 3

Ⅱ　第７３次教育研究愛知県集会の動向 5

Ⅲ　実践報告（小学校における実践） 6

自分事としてとりくむ子どもの育成　－SDGs を通して－　　井口　晴渚（名古屋・穂波小）

Ⅳ　本年度のまとめと今後の課題 16

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会総合学習部会

２０２３年度　教育課程研究委員

ブロック推薦　　◎部長　〇副部長

名　古　屋			尾　張			三　河		
氏名	単組	分会	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
多湖祐亮	名古屋	枇杷島小	近藤洸希	瀬戸	水野小	江崎　漠	豊田	小原中部小
近藤　駿	名古屋	大森中	溜久美子	尾北	城東中	大河内航	碧南	中央中

第６９次～第７２次教育研究全国集会リポート提出者

６９次			７１次			７２次		
氏名	単組	分会	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
◎佐々木章仁	豊橋	五並中	〇大島俊介	海部	(津島)東小	〇井口晴渚	名古屋	穂波小

・第７３次教育研究全国集会リポート提出者　影山　雅彦（豊橋・磯辺小）

Ⅰ　教育課程編成活動について

１　総合学習における「ゆたかな学び」

グローバル化の進展や、絶え間ない技術革新、地球温暖化による気候変動、新型コロナウイルス感染症など、現在の社会は数年前からは想像もできない姿となり、まさに「予測が困難な時代」へと突入している。そのような社会の変革期の中で、子どもたちに身につけさせていかなくてはならないこととして、教科書の内容を理解するだけではなく、それぞれの教科の学びを子どもたちが生きる実際の社会と結びつけながら、目の前にある課題を解決していく資質・能力の育成が求められている。

こうした背景のもと、本年度、愛教組連合は第７３次教育研究活動の重点として、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の２点を掲げている。

「子どもたち一人ひとりの意欲を大切に」することや、「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかる」ことはこれまでも総合学習が中核として担ってきた学びの姿である。また、教科書の内容に留まらず、「人・自然・文化などとのかかわり」を探究課題として扱う総合学習こそ、各教科の学びをつなぎ、子どもたちにとって真に「ゆたかな学び」を実現することに必要不可欠な領域であると考えられる。

そこで、そのような「ゆたかな学び」にむけて、総合学習として大切にしたい観点を以下のように考えた。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

総合学習は、予測が困難な時代において、持続可能な社会を実現するための資質や能力を育てることをねらいとしている。そのため、教科の枠にとらわれることなく、次のような資質・能力の育成に努めていくことが求められる。

- 探究的な見方・考え方を身につける。
- 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につける。
- 問題解決や探究活動に主体的、創造的、協働的にとりくむ態度を養う。
- 自己の生き方を考えることができるようにする。

○「生きてはたらく力」を育むために

総合学習では、「生きてはたらく力」を育むために、以下６点を重点として考える。

- 教科を横断する総合的な学習となるようにする
- 体験的な学習を効果的に取り入れる
- 協働的な学習になるように配慮する
- 探究的な学習の過程に基づいた単元を構想する
- 他人事としてではなく自分事としてむき合うことのできる探究課題を設定する
- 地域や各校の特色などをふまえる

以上のことに配意しながら、創意工夫のあるカリキュラムを編成することが大切である。

２　総合学習における教育課程編成

本校の総合学習は、三年間を通じて育てたい力を見通し、教育課程編成を行う。学校で大きな流れを共有し、学年ごとに三年後の姿を見すえながら具体的な活動内容や指導方法を検討し、実施している。

（１）ＣＵＥタイムとは

本校では、総合的な学習の時間を『ＣＵＥ（キュウ）タイム』と呼びます。

『ＣＵＥ』という言葉は、３つの英語の頭文字からできています。

Ｃ＝Ｃｕｌｔｉｖａｔｉｏｎ　（開拓）…新しい自分を開拓していく。
Ｕ＝Ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄｉｎｇ（理解）…自分や他人の考えや価値観、自分の周りの環境や自然などを理解していきながら、人間そのものを理解していく。
Ｅ＝Ｅｓｔａｂｌｉｓｈｍｅｎｔ（確立）…社会でたくましく生きていく自分を確立していく。

（２）ＣＵＥタイムのねらい

●「総合的な学習の時間」における目標

積極的に学び、考え、表現する学習を通して　**自己の生き方を考えることができるようにする**

＜三年間で育てたい生徒像＞

主体的に社会とかかわりをもち、得られた知識・情報を実生活に生かそうとする
・さまざまな学び方を通して、人や社会とのかかわりの中から、実生活との結びつきを考えることができる力
物事とのかかわりの中で自分の意見や考えを表現しようとする。
・他の意見や考えを尊重しつつ、自分なりの考えや意見をもって、物事を考えたり伝えたりする力

＜各学年の身につけたい力＞

①第１学年（基礎の段階）……必要な情報が的確にまとめられる
☆さまざまな事柄から課題や問題を発見する力
☆積極的に情報を収集する力
☆調べた情報を整理し、取捨選択し、格子をまとめる力
☆自分の考えをまとめ、積極的に意見を交換する力
☆解決にむけて、友だちと協力する力
★職業について関心をもち、自分の将来の生き方を考え、進路選択にむけての心構えをもてる。
★「働く人に学ぶ」を通して、さまざまな職業があることを知り、その内容について理解を深める。

②第２学年（確立の段階）……自分の考えや意見がもてる
☆物事に積極的にかかわろうとする力
☆解決にむけての手順や方法を考える力
★職業についての理解を深め、自己の適性と関連づけながら進路計画を立てられるようにする。
★職場体験学習を通して、働くことの責任や苦労、勤労の喜びを知り、職業に対する理解を深める。
★上級学校の種類や特色を理解し、さまざまな進学方法や概要を把握する。

③第３学年（発展・自立の段階）……表現したい内容が適切に伝えられる
☆多角的な視点で客観的に物事を見て課題を発見し、設定する力
☆先の見通しを立てて、計画的に学習をすすめる力
☆社会の中で、自分や相手の立場を理解し、他者を受け入れる力
☆調べたことを適切に発表・発信する力
★幅広く情報を得ながら、自己の適性や能力に合わせ、よりよい進路選択ができる。
★就職・進学の手続きのしかたについて正しく理解し、面接や試験の受け方について学ぶ。

２　課題追究学習について

●選択活動を中心とした総合学習　　●個人課題追究学習

【課題追究学習の目標】
- 自ら問題を見つめ、粘り強く追究することができる。
- 自分の判断を大切にし、責任ある行動をすることができる。
- グループで課題を追究したり、まとめたり、発表したりすることにより、人間関係作りを学習することができる。
- さまざまな人とのかかわりの中で人としての温かい心を身に付けることができる。
- 自己の生き方を考えることができる。

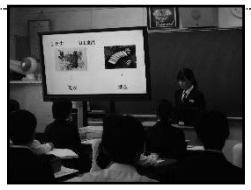
【各学年の目標】
１年　【CUE タイムを知り、班で考えを深める】・・・・・・愛知県及び岐阜県の事業所
２年　【CUE タイムで自分の考えや意見をもつ】　　職業調べ、上級学校調べ
　　【CUE タイムで進路に関する意識を強くもつ】　　職場体験学習
３年　【CUE タイムで自分の考えを深め伝える】・・・・・・修学旅行にむけての学習、３年間のまとめ

【追究していく課題】

分　野	学　習　内　容　の　例	
歴史・伝統	歴史	・郷土の歴史、文化について　・郷土の街道について　・城と城下町について　など
	伝統文化	・犬山焼にチャレンジ　・伝統的工芸品とは　・拳骨飴の秘密　など
環境・自然	ｴﾈﾙｷﾞｰ	・水力、火力、原子力発電と新たなエネルギー開発　・我が家の省エネ　など
	資源	・リサイクル社会の実現にむけて　・犬山のゴミ問題　など
	環境問題	・地球環境問題を考える　・ラムサール条約とは　・環境先進国ドイツ　など
	自然	・犬山の野鳥と草花　・里山とは　・開発か自然保護か　など
福祉・国際理解	福祉	・福祉施設訪問や福祉実践教室　・公共施設の福祉対策について　など

（平和）	国際理解	・海外青年協力隊について　・海外支援の取り組み　　など
	平和	・ＮＧＯ活動や団体　・平和維持活動について　・世界の紛争について　など
生活・技術 （食・健康）	生活	・現代と昔の生活習慣の違いは何か　・世界のさまざまな地域の生活　　など
	技術	・世界最先端の技術とは　・身の回りにみられる驚きの技術　　など
	食	・食の安全性について　・食糧問題と人口問題　　・食と体づくり　　など
	健康	・さまざまな病気ついて　・病気の予防　・リラクゼーション　など

３　三年間の学習の流れ

	時期	ＣＵＥタイムの学習	主な指導	関連学校行事
１年生	４月 ６月 １０月 １１月 １月	ＣＵＥタイムガイダンス ⇒分野選択 分野別ガイダンス⇒課題設定 訪問地決定⇒事前学習 ⇒質問状作成⇒行程表作成 礼状・まとめレポート作成 ⇒発表会[分野別・学年]	・「ＣＵＥ」タイムとは？（学習のねらい） ・各分野のガイダンスなど ・課題設定の仕方・依頼状と礼状の書き方 ・調査活動の基本・緊急時の対応 ・マナーとルールの指導 ・ 行程の確認 ・調査活動の還流とまとめや発表の仕方 ・仲間の発表から学びを広げる 総合Ｄａｙ『１年生：課題追究学習（愛知県及び岐阜県)』	体育大会（９月） 文化のつどい(１１月） 橋渡しの会（２月） 卒業式　（３月）
	３月	職業調べ⇒質問作成	・働く人から学ぶこと ＊進路学習（働く意義や職業適正を知る授業） ＊進路学習（身近な大人にインタビューをして、職業について知る授業）	
２年生	４月 ９月 １０月 １月	職場体験ガイダンス 職業調べ 訪問地希望調査・決定 訪問地事前学習⇒質問状作成 職場体験レポート作成 ⇒レポートの掲示や発表 東京ガイダンス（分野選択） ⇒テーマ設定⇒事前学習 ⇒質問作成⇒質問状送付 ⇒行程表作成	・年間の流れ、学習の仕方について ・パスカルの実施（適性を知る） ・働くことについての学習・保護者ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ ・希望調査　・マナーとルールの指導 ・緊急時の対応　・依頼状・礼状の作成 ＊進路学習 （夢をかなえるには…、進路の流れ、進路選択について） ・上級学校調べ 事前訪問⇒職場体験学習（10～11 月） ・課題設定の指導　・質問状の作成指導 ・書籍やインターネットを使用した追究 （１年時に学習したことから学びを広げる） ・依頼状・礼状の作成指導　・行程の確認 ※２年生終了時に修学旅行の事前学習を全て終える。	自然教室（５月） 体育大会（９月） 文化のつどい（11 月） 橋渡しの会（２月） 卒業式　（３月）
３年生	６月 11月	行程確認 まとめレポート作成 ⇒発表会[分野別・学年] ＊進路学習	・緊急時の対応、マナーとルールの確認 ・修学旅行を含め、３年間の総合的学習の時間の学びのまとめを作成する。 修学旅行『３年生：課題追究学習』（東京都及び周 まとめプレゼン作成『三年間のＣＵＥタイムから学んだこと』 ・進路選択について ・個別相談　・入試制度について ・面接指導 ・願書指導等 	修学旅行（６月） 体育大会（９月） 文化のつどい（11 月） 橋渡しの会　（２月） 卒業式　（３月）

４　令和５年度の実施状況

令和4年度は、タブレットを有効活用しながらCUEの活動を行うことができた。

・調べ学習での活用
・プレゼンテーションを作成して発表。
・グループでのデータ共有を活用し、行程表作成。
・classroomを活用しての、写真データの共有や提出物回収。
・Googleフォームで自己評価を提出させ評価に反映。

など、適宜タブレットを活用することができた。

令和５年度はコロナ禍後で、以前の活動（職場体験学習など）を復活させ、体験型の活動を増やしていくことができた。事前学習として、外部講師を招いての『マナー講座』を実施することができた。３年生は進路学習との切り替えを１０月に済ませ、個人追究学習から進路学習（キャリア教育）に移行することができた。

Ⅱ　第７３次教育研究愛知県集会の動向

１　報告された内容について

一、全体の感想

自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践、地域とかかわり、地域への愛着を深める実践、SDGs や環境、国際理解、福祉など今日的な課題を扱った実践が報告された。これらの実践においては、総合学習を核として学校や地域の特色を生かした教育課程を編成したり、子どもたちの興味・関心・思考の流れとその変化をとらえ、創意工夫を生かした教育活動を展開したりする実践者の真摯な姿勢が表出されていた。

二、討論の内容

⑴　ゲストティーチャーを効果的に活用するための工夫

キャリア教育や福祉、地域学習等、自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践や地域とかかわり、地域への愛着を深める実践が報告された。これらの実践では、地域の企業や団体など、多くの外部人材をゲストティーチャーとして活用していることから、ゲストティーチャーを効果的に活用するための工夫について話し合われた。助言者からは、本当に必要に迫られる場面でゲストティーチャーを呼ぶこと、ゲストティーチャーに思いを語ってもらう場合には子どもの求めに応じて語ってもらうことを事前に打合せしておくこと、ゲストティーチャーを巻き込んだ協働的な学びを実現できるように課題を設定することが効果的であるとの助言を得た。

⑵　子どもたちが課題を「自分事」としてとらえられるようにするための工夫

SDGs や環境、国際理解、福祉といったテーマに関して、子どもが課題の解決に取り組む実践が報告された。討論では、子どもがこれらの課題を「自分事」としてとらえられるようにするための探究課題との出会わせ方について話し合われた。助言者からは、SDGs を学ぶことが目的とならないように、地域のひと・もの・こととのかかわりから課題を見いだすこと、子どもたちが地域や自己の理想の姿を思い描き、その実現にむけて課題を設定することが重要であるとの助言を得た。

⑶　総括討論

子どもたちの自律的な探究を実現する総合学習のあり方について、各実践をまとめながら討論を深めた。実践者からは、子どもに寄り添う教員の姿勢、長期的な視点で単元を見通すこと、子どもたちが自己決定する場面を設けることが重要であるとの意見が出された。また、総合学習を学級や学年だけで考えるのではなく、学校全体で考えること、総合学習の学び方を子どもたちに伝えることが重要であるとの意見も出された。助言者からは、地域や社会との直接かかわって問題や課題の解決に取り組む学習が重要であること、子どもたちの振り返りやそれを見取り支援する教員の適切な評価が大切である等の助言を得た。

三、今後に残された課題

⑴　総合学習を中核とするカリキュラム・マネジメントのあり方の検討

⑵　総合学習を充実・発展させるための学校体制等の構築

Ⅲ　実践報告（小学校における実践）

報告書の要点

本学級の子どもたちは、活動に前向きな反面、自分の課題をもたず、周りの意見に流されて活動することがあった。そのため、漠然と調べ、課題を解決するために必要な情報を集めることができない姿がみられた。そこで、SDGs をきっかけとして、世界を取り巻くさまざまな問題と自分たちの生活とのかかわりを知ることを通して、学校や地域の問題に自分事としてとりくむ子どもを育てたいと考え、本研究にとりくんだ。

自分事としてとりくむ子どもを育てるためには、①自分の課題を発見すること②集めた情報の中から課題解決に必要な情報を精選すること③活動を振り返り探究心を高めることの３つを達成することが必要だと考えた。それら３つを達成するために、それぞれ①専門家による SDGs の考えにふれる場の設定、②思考ツールを活用した情報の整理・分析、③他者からの評価をともなう振り返りの場の設定という３つの手だてを探究的な学習の流れに位置づけて２つの実践を行った。

第１次実践では、環境や食育に関する専門家を招き、興味をもった SDGs の目標について情報を集め、新聞にまとめた。実践を通して、自らの課題を発見したり、他者からの評価を得て達成感を味わったりしたことで、子どもたちは SDGs への興味・関心を高めることができた。しかし、子どもによっては SDGs そのものが難しいテーマであったため、課題が自分事にならず学びへの意欲が低下してしまい、探究心を高めるところまでは至らなかった。

そこで、第２次実践では、子どもたちにとって身近な教職員をゲストティーチャーに招いた。子どもたちは SDGs をより具体的な内容としてとらえることができ、自分たちにできることを進んで考えるようになった。そして、学校全体にむけた SDGs 活動へと広げていった。実践が進むにつれて、自ら課題を発見し、課題を自分事として解決にむけて夢中になって活動するようになった。

１　研究のねらい

４月当初、ある子どもから「SDGs を知っていますか？」と尋ねられた。ほかの子どもたちに SDGs のことを知っているか尋ねてみると、わたくしを含めほとんどの子どもが SDGs について知らなかった。その子どもは SDGs に興味をもっており、17 の目標をすべて暗記していた。そして「みんなに SDGs を知ってもらいたい」と、学級で SDGs の 17 の目標とマークを紹介した。すると子どもたちは「マークは見たことある」「地球が大変だ」と SDGs に興味をもち始め、理科や社会科でも「これも SDGs かな？」と話題になるほどであった。一人の子どもの発言をきっかけに、わたくしは SDGs には 17 の目標があることを知り、さまざまな目標に世界のみんなで自分事としてとりくむ姿が、わたくしのめざす子どもに似ていると感じた。

本学級の子どもの多くは、どのようなことにも前向きにとりくむことができる。グループ活動では、互いに助け合う姿もみられる。しかしその中で、自分の課題をもたず、周りの意見に流されて活動する子どもがいることに気付いた。また、漠然と調べ、課題を解決するために必要な情報を集めることができない姿もみられた。その結果、地図やリーフレットにまとめる活動においても、完成させることが目的となってしまい、探究心をもってとりくむ様子がみられず、寂しく感じた。

わたくしは、子どもたちには自ら課題をもち、自分事としていきいきと課題解決に向かってとりくんでほしいと願っている。そこで、SDGs というわたくしたち人間がとりくむべきさまざまな問題について学ぶことをきっかけとし、一人ひとりが自分の課題を発見し、学校や地域の問題に自分事としてとりくむ子どもを育てたいと考えた。

２　ねらいを達成するために

（１）研究の対象　黒石小学校４年生 37 名

手だてについて

自分事としてとりくむ子どもを育てるためには、①自分の課題を発見すること、②集めた情報の中から課題解決に必要な情報を精選すること、③活動を振り返り探究心を高めること、以上の３つを達成することができる手だてが必要であると考えた。

手だて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

課題を設定する場面で、SDGs の理念に関連するさまざまな専門家を招いて、出前授業を行う。専門家による SDGs の目標達成にむけた活動や考えに直接ふれることで、「自分もやってみたい」という思いが高まり、自分の課題を発見することができると考える。

手だて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

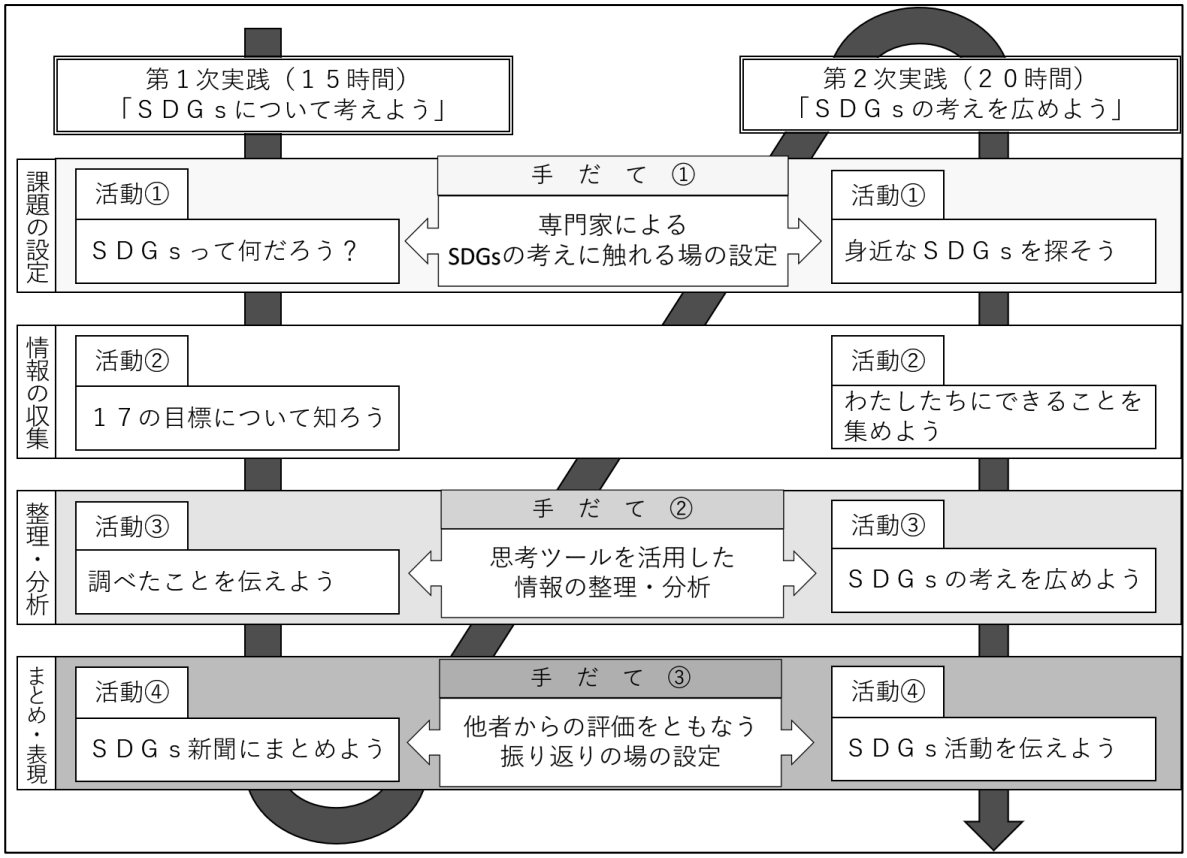
子どもたちが発見した自分の課題に合わせて集めた情報を整理・分析するため、思考ツールを活用する。思考ツールを活用することで、集めた情報を可視化でき、整理・分析しやすくなるため、課題解決に必要な情報を精選することができると考える。

手だて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

精選した情報をまとめ・表現の場面で、自分が伝えたい相手に発信した後、活動を振り返る。その際、情報を伝えた相手から、感想や意見などの評価をもらう場を設ける。他者からの評価をともなう振り返りを行うことで、「やってよかった」という達成感を味わったり、「次はもっとこうしたい」と次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めて、自分事としてとりくむ子どもが育つと考える。

（２）単元と実践計画

自分事としてとりくむようになるための３つの手だてについて、次のような探究的な学習の流れに位置づけた。



【実践計画図】

３　第１次実践について

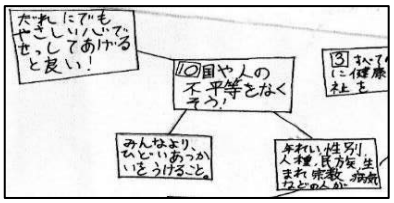
（１）第１次実践の手だてについて

手だて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

環境や食育にかかわる専門家を招いて出前授業を行う。気候変動や地域の自然、食育などの専門家の考えにふれることを通して、自分の課題を発見することができるようになると考える。

手だて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

発見した自分の課題と関連のある SDGs の目標について調べ、集めた情報をコンセプトマップ上にまとめる。その後、関連する情報を線でつなぎ、集めた情報の関係を可視化させることで、新聞に載せる記事が決めやすくなると考える。



【コンセプトマップ】

手だて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

完成した新聞を読み合った後、「はじめて知ったこと」や「共感したこと」を付箋紙に書いて、相手の新聞に貼る活動を取り入れる。他者からの評価を通して、達成感を味わったり、次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めることができると考える。

（２）第１次実践の様子

活動①　SDGs ってなんだろう？（課題の設定）手だて①

まず、子どもたちが他教科の授業や学校行事の中で興味をもっていたテーマについて出前授業を行うことにした。

理科「天気と気温」の学習で「教科書の気温より測ったときの気温の方が高い」「地球温暖化のせいかもしれない！」という話題が上がったことをきっかけに、環境保護の専門家を招き、地球温暖化について学ぶ出前授業を行った。環境に関するクイズや手回し発電の体験を通して楽しみながら温暖化について学んだ。子どもたちは、「温暖化について詳しく知りたい」「二酸化炭素を減らさなきゃいけない」などの温暖化への興味・関心を高めていた。

社会科「ごみとわたしたち」の発展学習として、名古屋市のごみについて学ぶことができる出前授業を行った。まず、ごみの埋め立て処理場や大量のペットボトルを処理する工場で働く人の様子の動画を視聴した。そして、専門家からペットボトルのふたを手作業で分別していることを聞くと「こんなにたくさんのふたを人が分別するのは大変だ」「このままでは地球がごみだらけになるから、なんとかしないと」と口々に発言しており、自分の課題を発見していることが伝わってきた。

出前授業をきっかけに、「温暖化って気候変動の一つだよね」「プラスチックごみが増えると、海の生き物が守れない」など、発見した自分の課題と SDGs の 17 の目標を結び付けた発言が多くあがるようになった。そこで、「温暖化やごみの話は生き物にだけかかわるのかな」と問いかけると、「SDGs のいろいろな目標とかかわっていると思う」「どのような目標とかかわってるか調べたい」という意見が挙がったため、発見した自分の課題とかかわりのある 17 の目標について、情報の収集を行うことにした。

活動②　１７の目標について知ろう（情報の収集）

17 の目標について、子どもたちは本やインターネットを活用して情報を収集した。調べたことをワークシートにまとめていくと、「SDGs の目標どうしがつながっているから、調べる時間が足りない！」と、空いている時間を見つけて調べ学習を行う子どもが出てくるほど、夢中になって調べていった。そして、ワークシートが集めた情報でいっぱいになると、「なんだか SDGs に詳しくなってきた」と、満足そうにしている子どもの姿がみられるようになった。

活動③　調べたことを伝えよう（情報の整理・分析）手だて②

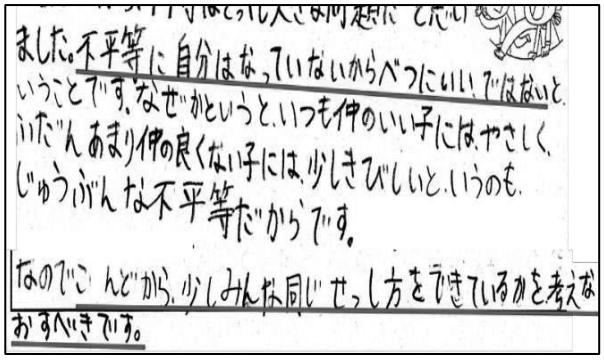
情報収集をしているうちに、子どもたちどうしで「どの目標を調べているの？」と自然と聞き合う様子がみられるようになった。同時期に、国語科の授業で新聞のつくり方を学習していると、「新聞をつくるならSDGs新聞がいい」と子どもから意見が挙がった。すると、それぞれの目標について新聞にまとめたいという意見が多かったため、集めた情報をもとに「SDGs新聞」を一人一枚まとめることにした。しかし、情報収集をしていくたびに、集めた情報が膨大になり整理しきれない子どもがでてきた。そこで、相手により伝わる新聞をつくるために、集めた情報を整理・分析する活動を行った。

まず、集めた情報をコンセプトマップに示し、その中から記事にしたい事柄を選んだ。すると、SDGsの目標のうち、貧困、飢餓や福祉などの情報を多く集めていたある子どもは、コンセプトマップによって考えを整理・分析できるようになってきた。そして、テーマを「世界がいかに不平等か」と「平等とは、だれにでも優しい心で接すること」に設定して、記事を伝えることにした。

活動④　SDGs新聞にまとめよう（まとめ・表現）手だて③

活動③で選んだ記事を新聞にまとめた。ある子どもは、マッピングで整理した情報から障がいのある子どもが世界に多くいることや、誰にでも優しい心をもって接してほしいという願いを、グラフや記事で表すことができた。

その後、完成した新聞を互いに読み合い、感想を付箋紙に書いて、新聞の裏に貼る活動を行った。子どもたちは付箋紙を通して他者からの評価をもらったことで、達成感を味わうことができた。また、友だちの感想から、「不平等に自分はなっていないからいいのではない。みんな同じ接し方をできているかを考え直すべきだ」という新たな課題が生まれていた。


ました。不平等に自分はなっていないからべつにいい、ではないと
いうことです。なぜかというと、いつも仲のいい子には、やさしく、
ふだん、あまり仲の良くない子には、少しきびしいと、いうのも、
じゅうぶんな不平等だからです。
なのでこんどから、少しみんな同じせっし方をできているかを考えな
おすべきです。

【振り返りカード】

（３）第１次実践の成果○と課題●

○　専門家からSDGsの考えにふれる場を設定したことで、「温暖化を止めたい」「ごみを減らしたい」など、自分の課題を発見することができた。

○　思考ツールを活用して情報を整理・分析したことで、「優しい心で誰にでも平等に」という思いに至った子どものように、必要な情報に精選することができた。

●　「温暖化」「飢餓」など、難しい内容があったため、発見した課題が自分事にならなかった子どもがいた。

●　まとめ・表現の場面で、一人で新聞にまとめることが難しく、意欲が低下してしまった子どもがいた。

（４）第２次実践にむけて

設定した課題が自分事にならず意欲が低下してしまったのは、手だて①の出前授業や専門家が、その子どもたちにとって身近ではなく、自分の課題を十分に発見できなかったためだと考える。また、まとめの場面では、自分の思いを十分に表出できず、意欲を持続することができなかった。そこで第２次実践では、子どもたちにとってより身近な専門家や事柄を選ぶことにした。

さらに、第２次実践では、同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、自分たちの思いが相手に伝わるようにするために、新聞以外の方法からも選ぶことができるようにした。

４　第２次実践について

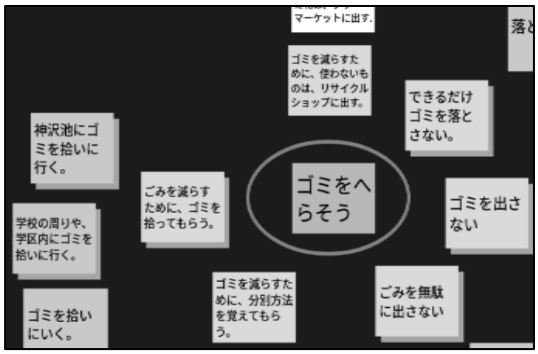
（１）第２次実践の手だてについて

手だて①：専門家による SDGs の考えにふれる場の設定

SDGs の目標を身近にとらえることができるよう、校内の教職員のように子どもたちにとってより身近な専門家を招いて出前授業を行うことにした。身近な専門家の話を通して平等、食育や環境保全などについて、自分の課題をより具体的に発見できるようになると考える。

手だて②：思考ツールを活用した情報の整理・分析

第１次実践では、コンセプトマップを活用して情報の精選を行った。第２次実践では、タブレット端末の学習支援アプリの思考ツールを用いて、SDGs の考えをどう広めるかについて整理・分析する。学習支援アプリの思考ツールでは、画面上で集めた情報をカードにして、自由に移動したり取捨選択したりすることができる。また、学習支援アプリの中にある生徒間通信機能を使うことで、子どもどうしでカードを送り合うことができるため、紙を使って活動するよりも、速く簡単に情報の整理・分析がしやすくなる。



【思考ツール】

まず、発見した課題を中心に示し、周りに集めた情報を貼る。次に、似た情報を重ねたり近くに置いたりする。最後に、課題解決のための方法を外側に貼るようにする。このように順序立てて整理・分析することで、課題解決に必要な発信活動の方法へと情報を精選することができるようになると考える。

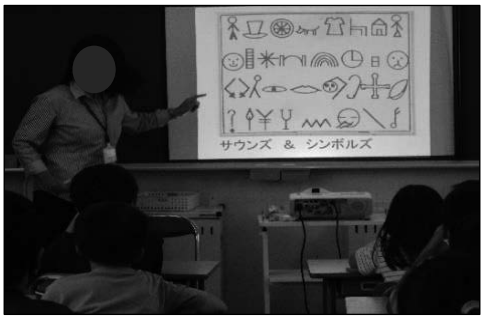
手だて③：他者からの評価をともなう振り返りの場の設定

学習支援アプリのアンケート機能を使って、発信したことが伝わったかどうか、他学年に調査する。他者からのアンケート評価によって「思いが伝わった」と達成感を味わったり、「よりよい方法があったのでは」と次への課題が生まれたりするようになり、探究心を高めることができるようになると考える。

（２）第２次実践の様子

活動①　身近な SDGs を探そう（課題の設定）手だて①

第１次実践を通して、人権や平等について興味をもっていた子どもから「６年生は、校長先生が道徳の授業をしてくれたって聞いたよ！いいなあ」という発言があった。それは、人権週間の特別授業として、校長が６年生にむけて人権講話をしていたことを、きょうだいから聞いていたのである。その子どもの発言を受けて、校長をゲストティーチャーに招いて、平等をテーマとしてパラリンピックの話や養護学校での体験談の話をしてもらうことにした。学校内の施設には、段差を減らしたり階段に手すりが付いたりするなど、子どもたちが使いやすくするための工夫があることを聞いた。子どもたちからは、「階段に手すりがついているのも、大切なことなんだ」「みんなが同じように楽しく学校に行けるといいね」と、学校内での平等に気付く発言が多くみられるようになった。また、「学校にもいろいろな人がいるから、学校ももっとみんなに平等になってほしい」と、平等に関する問題を身近にとらえる子どもの姿がみられた。



【校長による平等についての話】

また、本校の栄養教員は、本学級の子どもが１年生のころから毎年食育指導を行っており、子どもにとって身近な存在である。そこで、本年度の食育指導では、SDGs と給食が関連した授業をしていただいた。給食ができあがるまでには多くの人がかかわっていることや、つくっている人々の思いや願いについて話していただいた。授業の中で、１日に全校で出る給食の残飯量を聞くと、「１日でそんなにたくさん捨てられているなんてもったいない！食品ロスだ」と声が多く挙がった。

【栄養教員の食育指導】

出前授業後には、「給食であんなに残量があるなんて食品ロスだ」「飢餓をなくすのに食品ロスはだめだ」などの感想がでてきた。出前授業の講師が身近な専門家だったことで、子どもたちは、より SDGs の問題を身近に感じ、自分事としてとらえ始めていることを感じた。また、活動後の振り返りと話し合いでは、「SDGs はこれからの未来にかかわる。もっとみんなに知ってもらわないといけない」という意見が挙がるようになった。そこで、SDGs の考えを校内に広める活動を行うことになった。

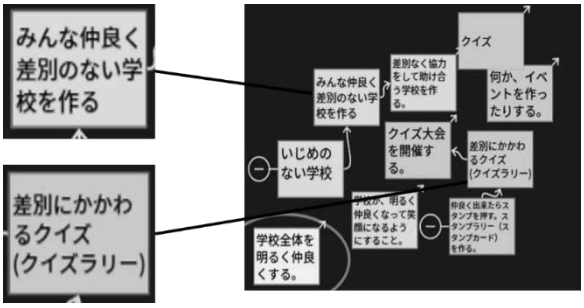
活動②　わたしたちにできることを集めよう（情報の収集）

課題を達成するために自分たちにできることを考え、ワークシートに書き出す活動を行った。身近でできる活動については、子ども用タブレット端末の中にある名古屋市独自の SDGs を学ぶことができるアプリや、インターネット、図書室の本などを使って情報を収集した。

活動③　SDGs の考えを広めよう（情報の整理・分析）手だて②

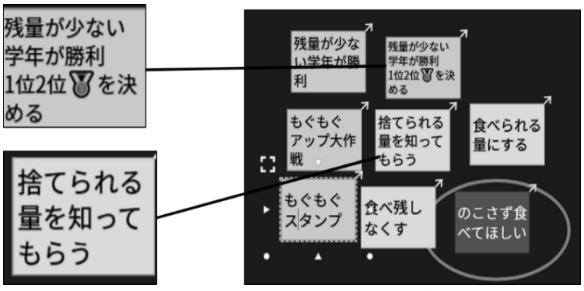
自分たちにできることについて、集めた情報を書き出した後、同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、課題を解決するために何ができるか話し合った。話し合いをする際、学習支援アプリの思考ツールを使って話し合うことにした。

「不平等をなくそう」という課題を発見したグループは、「平等の大切さを伝える」「全校で遊ぶ」など、互いに集めた情報を整理・分析し、「みんなに仲良くなってもらえるようにする」「差別やいじめをなくすことを呼びかける」という２つの情報を精選した。伝える方法についても同様にして話し合いをすすめ、世界の不平等についてのクイズラリーと、いじめをなくそうというポスターを掲示するという情報を精選することができた。



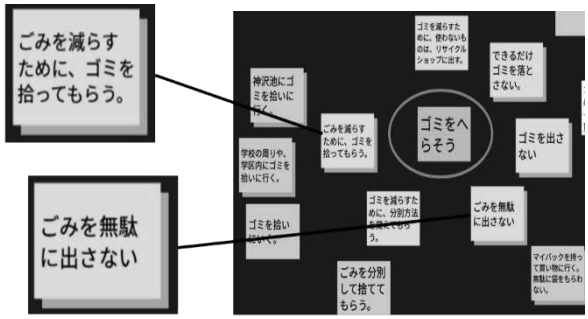
【不平等チームのマップ】

「食品ロスをなくそう」という課題を発見したグループは、栄養教員の話から「給食を残さず食べてほしい」という願いをもち、「食べられる量だけ作ってもらう」「捨てられている量を知ってもらう」などの集めた情報から思考ツールを使って精選した。そして、「残量調査を行って、残量が少なかった学級を発表する」と、残量調査を行うことにした。食品ロスチームは、栄養教員に協力をお願いし、発信活動にむけて意欲的に話し合いをすすめることができた。



【食品ロスチームのマップ】

「ごみを減らそう」という課題を発見したグループは、情報収集の活動では、「ごみを落とさない」や「マイバッグを持ち歩く」など、情報が多岐に渡っていた。その後、思考ツールを活用しながら話し合いをすすめ、互いに集めた情報を整理・分析した。その結果、「ごみを減らそう」という課題解決にむけて「公園をきれいにすればごみが減る」と、ごみ拾いという情報を精選することができた。



【ごみ拾いチームのマップ】

活動④　SDGs 活動で伝えよう（まとめ・表現）手だて③

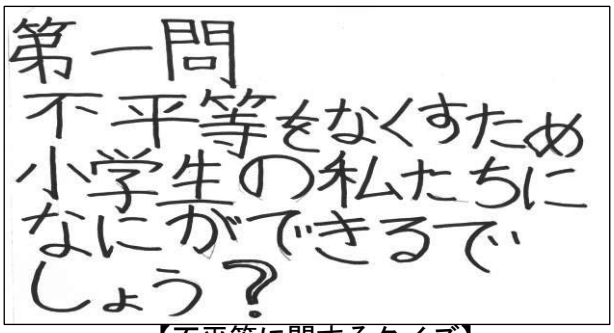
まとめ・表現の場では、それぞれ課題解決にむけて精選した情報をもとにして全校にむけて発信活動を行った。グループによって伝えたい相手や学年がちがっていたため、課題に合わせて低学年むけ、高学年むけなど、伝える相手もグループで決めることにした。また、伝えたい相手に合わせてポスターやクイズ、放送やイベントなど発信の仕方もグループで選択できるようにした。以下は、各グループの活動内容である。

課題	発信活動（まとめ・表現）	チーム名
不平等をなくそう	クイズラリー	助け合いチーム
食品ロスをなくそう	ポスター、残量調査	きがヒーロー
ごみを分別しよう	分別ゲーム	分別マスター
ごみを減らそう	公園のごみ拾い	ごみ拾いチーム
エコ工作	牛乳パック工作プレゼント	エコ工作
SDG s を知ってもらおう	スタンプラリー、かるたづくり	SDG s セブンティーン
自然を大切にしよう	ポスター、樹木マップ	自然大切
水を大切にしよう	ポスター	水は大切

【各グループの課題と発信活動の内容】

助け合いチームは、不平等をなくす大切さを知ってもらうために、世界の不平等に関するクイズやポスターをつくり、校内に掲示した。学校内で身近に感じられる不平等や不平等をなくすためにできることなどのクイズをつくり、その答えをポスターとして掲示した。それをクイズラリー形式にし、全問正解したチームを表彰することにした。「みんなが平等で仲良くなってほしいから楽しい気持ちになってほしい」という子どもの思いが、クイズラリーという工夫につながっていた。

【「不平等をなくそう」と呼びかけるポスター】



【不平等に関するクイズ】

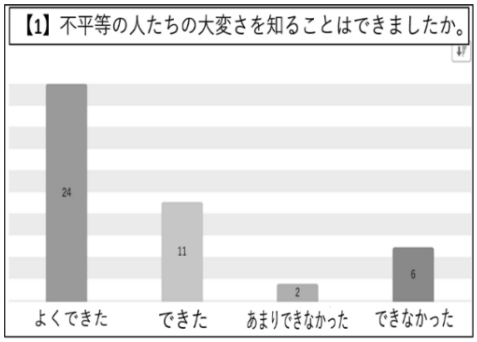
給食での食品ロスをなくすために、給食の残量調査を行うことにしたグループは、全校にむけて３日間の残量調査を行った。その後、３日間残量ゼロだった学級を校内放送で発表し、賞状を渡した。「きがヒーローチーム」の中には、第１次実践で飢餓について新聞にまとめた子どもがいた。新聞をまとめるときには、「書くのは難しいなあ」と発言し、意欲の低下がみられていたが、残量調査やポスターづくりでは、最後まで意欲的に活動していた。「今日も残量ゼロだといいな」とつぶやきながら調査に出かけたり、ポスターをつくるときには、「全校のみんなに見てほしい」と、校内で全学年が通る掲示板に掲示したりするなど、前向きに活動することができた。そして、校内放送で残量調査を呼びかけたりポスターを校内に掲示したりするたびに「きがヒーローだ！」と他の子どもに声をかけてもらい、とてもうれしそうだった。

【分別ゲームの手づくりのごみ箱】

分別マスターグループは、１・２年生に分別の仕方を知ってもらうために、「分別ゲーム」を行った。よりごみの分別を身近に感じてもらうことができるようにと、子どもたちはペットボトルやキャップ、お菓子の箱を配り、段ボールでつくった手づくりのごみ箱に分別してもらった。１年生の子どもが、どのようにごみを分別してよいのかわからず困っていると、「どこかにマークがあるよ」と分別の手がかりとなるマークに着目するように声をかける姿がみられた。また、手づくりのごみ箱には分別マークがついた看板を書いて分別がしやすいように工夫した。最後に、分別ができた学級には手づくりのメダルを渡した。

【残量調査の様子】

発信活動を終えた後、各グループは学習支援アプリでアンケートを作成し、参加した学級に回答してもらった。回答結果が届くと「すごくよい結果になっていたよ！」とうれしそうに報告をした。



【助け合いチームのアンケート】

活動後の振り返りでは、「アンケートで伝わったとわかってよかった」「たくさん参加してくれてうれしかった」など達成感を味わう感想が多かった。また「今度は学区のみんなで学区全体のごみ拾いをしたい」「お母さんたちにも分別ゲームをやってもらいたい」など、次への課題が生まれている姿も多くみられた。

（３）第２次実践の成果○と課題●

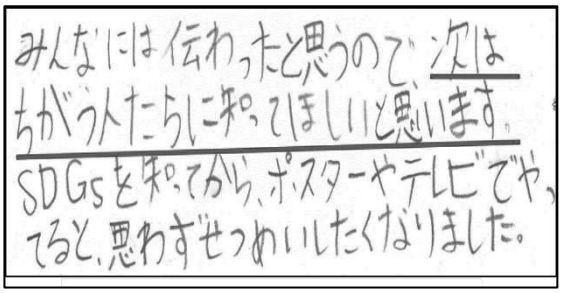
○　身近な専門家の考えにふれる機会を設けることで、SDGs がより身近になり「自分たちにもできることがある」と、自分の課題をより明確に設定する子どもがみられるようになった。

○　学習用タブレットの思考ツールを活用したことで整理・分析しやすくなり、互いの情報から必要な情報を精選することができた。そして、最後まで思いをもって発信活動を行うことができた。

○　参加者へのアンケート結果をもとに振り返ったことで、他者からの高評価によって達成感を味わうことができた。そして、アンケートをもとに「もっと広めたい」と次への課題が生まれ、探究心を高めることができた。

５　第２次実践後の子どもの変容

他学年からのアンケートで「SDGs についてわかった」「楽しかった」と高評価をもらった子どもたちは、「もっと広めたい」と次への課題が生まれはじめていた。「お家の人を呼んで、一緒に分別ゲームをしたい」という子どもの発言をきっかけに、家庭に SDGs の考えを広めるにはどうすればよいかという新たな課題が生まれた。第２次実践までの成果によって、子どもたちは活動の振り返りから次の課題を見つけ、思いをもって活動をすることができるようになった。それは、自ら課題を見つけ、自分事としてとりくもうとする姿だとわたくしは感じた。以下は、その後の子どもたちの活動である。



【第２次実践後の振り返りカード】

活動①　家庭の SDGs を探そう（課題の設定）

学級での話し合いの中で、「お風呂や水道の水がもったいないときがある」「電気をつけっぱなしにしている」「エコバッグを使ってもらいたい」「家でも食品ロスをなくしたい」など、すぐにたくさんの意見が出た。そこで、子どもは自分が伝えたい内容に合わせてそれぞれの課題を設定した。以下は、各グループが設定した課題である。

課題	発信活動（まとめ・表現）	チーム名
食品ロスをなくそう	プレゼンテーション	ストップ食品ロス
電気の節約	クイズ	電気を節約しよう
不平等をなくそう	紙芝居、プレゼンテーション	ジェンダーヒーロー
自然を守ろう	クイズ、プレゼンテーション	自然環境
健康の大切さ	プレゼンテーション	健康大切
生き物を大切にしよう	紙芝居、プレゼンテーション	いきもの大切
不平等をなくそう	クイズ	不平等ポリス
水の無駄をなくそう	実験動画	水は大切
プラスチックごみを減らそう	エコバッグ工作	エコバッグを使おう

【各グループの課題とその後のまとめの内容】

活動②　わたしたちにできることを集めよう（情報の収集）

同じような課題をもつ子どもどうしでグループをつくり、課題を達成するためにどんなことを家族に伝えるとよいかを考え、情報収集を行った。身近でできる活動については、子どもの学習用タブレット端末の中にある、SDGs を学ぶことができるアプリやインターネット、図書室の本などを使って情報収集を行った。どのグループも伝えたい思いや課題が明確になっており、自分たちで相談しながら意欲的に情報収集をしていた。

活動③　SDGs の考えを家庭へ広めよう（情報の整理・分析）

各グループは集めた情報をもとに、課題を解決するために何ができるかを学習支援アプリの思考ツールを使って話し合うことにした。家族に伝えるために、プレゼンテーション資料にまとめて、発表会を行うことにした。子どもたちは、「家庭で実践できるもの」という観点で情報を精選していった。情報を整理・分析していくうちに、「せっかくだから、家庭ですぐにやってみようと思ってほしい」「大人むけだから、温暖化みたいに少し難しくても伝わるね」など、相手を意識して考えたり思いをもったりして話し合いをすすめることができた。

活動④　SDGs 発表会をしよう（まとめ・表現）

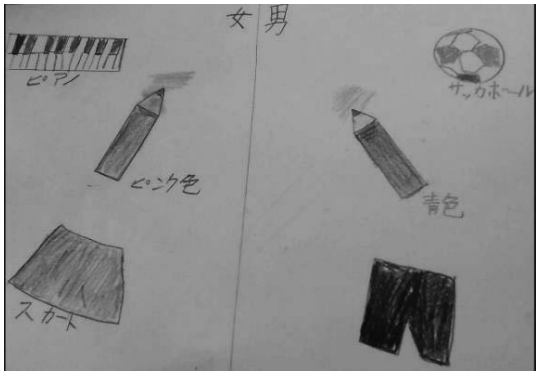
活動③で選んだ情報を、学習支援アプリを使ってプレゼンテーション資料にまとめ、グループごとに発表した。

「プラスチックごみを減らそう」というテーマを選んだグループは、新聞紙でつくるエコバッグのつくり方を、実際に作っている動画にまとめて発表した。

【水の無駄を示す動画】

「水の無駄をなくそう」というテーマを選んだグループは、蛇口の水を出しっぱなしにして手を洗ったときと、石鹸を使っている間は、水を止めて手を洗ったときの動画をつくった。その際、それぞれ水そうに溜まった水の量の違いがわかるように発表した。そして、「出しっぱなしにすると、こんなに水がもったいないです。みなさんも無駄遣いはしないように気をつけましょう。」と節水を呼びかけた。

「不平等をなくそう」というテーマを選んだグループは、SDGs のジェンダーレスの考え方にふれて発表した。色、服装やスポーツなどについて、「男の子だから、女の子だからなど、性別の考え方をなくしましょう」と、紙芝居にわかりやすくまとめて発表することができた。



【平等を呼びかける紙芝居】

以上のように、子どもたちは自ら課題を見つけ、情報を集め、話し合う活動を通して、自分事としてとりくもうとする姿を見せた。

６　研究のまとめ

実践が進むにつれて、子どもたちは自ら課題を発見し、互いの考えを伝え合うようになった。その課題解決にむけて夢中になって活動する姿は、SDGs を自分事としてとらえ、行動する姿であった。これはまさに、わたくしがめざす子どもの姿であると感じた。

「一人から周りへ。一人の考えを周りにつなげることで、SDGs の考えが広がる。今のぼくたちがそうだと思います。」話し合いで出た子どもの言葉が、とても印象に残っている。一人の子どもの質問から SDGs を知り、学級の子どもに伝え、学校全体、そして「今度はお母さんにも知ってほしい」と、家庭にも広がっていこうとしている。

発信活動として、ごみ拾いゲームをしたとき、「この間もごみ拾いをしていたね」と地域の方から声をかけられた。学級の子どもが、いつも遊んでいる公園のごみ拾いを自主的にしていたのである。また、委員会活動では、「環境委員会でもごみ拾いゲームをやろう！」「今度は給食委員会で残量調査をするよ！」など、さまざまな報告を子どもから受けた。

実践を終えて、子どもたちは、学級はもちろん、委員会活動や日常生活など、学級の枠を越えて活動をしようとする姿がみられるようになっていった。

わたくしは、今後も子どもたちの思いや願いに寄り添いながら、さまざまな活動を、自分事としてとらえて行動できる子どもを育てていけるよう、実践をすすめていきたい。

Ⅳ　本年度のまとめと今後の課題

１　本年度の課題に対するまとめ

⑴　総合学習を中核とするカリキュラム・マネジメントのあり方の検討

実践研究からも、教育研究愛知県集会での報告内容からも、各学級において目の前の子どもたちの姿からカリキュラムを創造し、「ゆたかな学び」が展開されていることがわかる。学校や地域の特色を生かして年間を通した単元を構想したり、教科での学びを起点としてより深く探究したい事柄を見出して探究課題を設定したりするなど、総合学習の特色をふまえて各学校でカリキュラムが自主編成されている。しかしながら、担当する先生が変わると探究課題が大きく変わり、その年の学びが次の年の学びとつながりづらいことや、中学校においては学年体制ですすめていく必要性が高く、子どもの意識に基づいたカリキュラムが創造しづらいという課題も見えてきた。持続可能な学びを実現していくために、教科の内容と関連させたカリキュラムを作成して共有することや、学年や小・中学校を超えた継続的な実践とするための体制づくりなどについても、さらに検討していく必要がある。

⑵　総合学習を充実・発展させるための学校体制等の構築

学校や学年として、総合学習に関する引き継ぎ体制を強化することが求められる。学年ごとに予め題材が設定されている学校も多いだろう。ある学校では、４月に前年度の学年教職員から、総合学習をどのようにすすめるとよいか、何が大変だったかなどの情報交換会を行っている。４月に１年の見通しを立てることで、学年教職員が共通意識をもって単元を展開することができる。３月には、一年間の学習を振り返りながら、年間指導計画の修正を行うことで、よりよい年間計画をつくりあげている。このように、学校として年間指導計画を磨き上げ、引き継ぎを行っていくとよいだろう。

また、年間指導計画はあくまで計画である。子どもたちの考えに沿って、単元の展開を変化させる柔軟性が重要である。ある学校では、教職員室の学年ホワイトボードに総合学習の単元計画を付箋で貼り、教職員に見えるようにしている。子どもたちの考えを受けて、単元の展開を変化させるときには、新たな付箋を上から貼り直している。この学校では、調べたい事柄や聞きたい内容という情報収集の中身は変化するが、１年を通した大きな流れの変化はなかったとのことである。

ここに示したものは一例ではあるが、学年教職員で共通理解をすすめる体制や学校全体で取り組もうとする仕組みづくりは今後も重要課題となるだろう。

２　今後にむけた課題

以上のことをふまえ、今後にむけた課題を以下の３点にまとめた。

（１）持続可能な実践とするための教員間の連携や学校体制のあり方

（２）探究的な学びを実現する手段としての ICT 機器や思考ツールなどの有効な活用のあり方

（３）今日的な諸問題の根本的要因に迫ることで、社会変革につながるような深い学びの実現にむけた授業展開の工夫

今後も「ゆたかな学び」の実現にむけた教育課程編成にむけ、研究を深めていきたい。